

市史講座 第9回 シンポジウム ミニ・レポート

平成24年3月10日(土) 最終回 シンポジウム「世界に開かれた松江」が開かれました。



はじめに基調講演として、大日方克己先生から「古代律令制下の出雲をめぐる国際関係-渤海との交流を中心に-」という題でお話いただきました。

大日方先生は、8～10世紀にみられる東アジアの国際秩序の変化を通して、9～10世紀初頭は山陰が渤海使が到着する地となっていたことを示されました。出雲に到着した渤海使は、島根郡のおそらくは千酌あたりに数ヶ月にわたって滞在したそうです。具体例として弘仁5年(814)来着した王孝廉の一行に触れられ、渤海使の滞在費支出が出雲国府ひいては出雲の人々にとって大きな負担となっていたことを検証されました。



続いてパネルディスカッションでは、井上寛司先生がコーディネーター役を務められ、原始古代史部会・中世史部会・近世史部会・近現代史部会の先生方から、それぞれの時代の国際的な交流のあり方の特徴があげられ、一巡の後にまとめとして再び一言ずつご発言いただきました。

勝部昭先生は、松江市域から出土した原始・古代の考古資料の具体例をあげながら、中国・朝鮮半島の文化の影響を受けたものが数多くあることを指摘され、背景にある技術交流へと参加者の関心を導かれました。あわせて中国や韓国と島根県の考古学研究者間の学術交流が広がっていくことへの期待も語られました。

大日方先生は、9世紀半ば以降大地震や大津波が立て続けに起こり、天災による動揺と新羅海賊の来航といった対外危機や異なった文化を持つ俘囚(蝦夷)の反乱などが、貴族の意識の中で結びつき、その危機意識が神国思想の萌芽へとつながっていったことを指摘され、異文化への対応についての注意を促されました。

長谷川博史先生は、中世は、美保関代官松田氏の名が1467年に李氏朝鮮で成立した『海東諸国記』にみえるように、地域の領主がそれぞれに李朝と通交を結んでいた多元的な時代で、その背景には玄界灘をはさんだ人々の日常的な交流があり、日常的なネットワークを基盤に公的な交流が成立していることを指摘されました。

小林准士先生は、近世では鎖国政策により、一般人が外国に触れるのは外国船の漂着や日本船の外国漂着といった機会に限られていたことを話され、松江地域では島根半島への朝鮮人の漂着が確認され、救助し長崎へ送るまでの間生活の世話をしており、日本人の漂着も同様に救助送還されたこと、その前提として国家間の互恵が図られていたことを指摘されました。

居石正和先生は、ここ数十年の間に、国際交流の担い手として自治体や民間団体などが果たす役割が大きくなっていることを話されました。

今回のシンポジウムを通して、松江市域を舞台に多様な国際交流が古代から現代にいたるまで連綿と繰り広げられていたことへの理解が深められたのではないのでしょうか。

参加された方々からは、国際交流を考えるよいきっかけとなった、地域史を学ぶ上で重要な視点を持つことができた、といった趣旨の感想をいただきました。

講演、発言をいただいた先生方、また参加者の皆様には、厚く御礼申し上げます。